

## 書評

# 教育学の復権をめざして： 現象学による「欲望－関心相関的」体系化と 実践現場への応用

書評： 苫野一徳. 2022. 『学問としての教育学』東京：日本評論社.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程  
加藤安人

誰しも、今までの人生で何らかの教育を受けたことがあるに違いない。特に義務教育をはじめとする公教育の多くには、教育方針や教育カリキュラムがある。しかし、それらの中で「教育」また「よい教育」とは何を指すのか、しっかり検討され定義されているだろうか。本書は、哲学者・教育学者であり、現熊本大学教育学部准教授である苫野一徳が、公教育を対象とした教育学の体系化に挑んだ意欲的な一冊である。

本書は「はじめに」、第1章から第5章、「あとがき」から構成されている。

「はじめに—教育学を“役立たせる”」では、教育学が「二流」と揶揄されていることなどを挙げ、存続への危機感を示しながら、「学問としての教育学を体系化する」という本書の大目標が掲げられる。

第1章「教育学の根本問題」では、教育学の危機的な状況として学問の細分化が起こっており、その全体像を誰もがわからなくなっていること、その背景としてポストモダン思想の隆盛があることを指摘する。本書での具体例を交えれば、「自律を促す教育は実は権力に従順にさせるための訓練だ」などといったさまざまな批判に圧倒され、教育的価値のあらゆる面が相対化されてしまい、もはや誰も理想・理念・目的を語れなくなった、といったことである。

第2章「メタ理論 I 哲学部門—『よい』教育とは何か」では、〈公教育＝教育学〉の構想指針原理の導出の方法論としてフッサール現象学を土台としている。フッサール現象学によれば、「目の前のマグカップは客観的に存在する」といった客観主義はいったん脇に置く（エポケーと呼ばれる）「自然的態度」が必要であるとする。一方で、それでも「マグカップが存在する」という「確信・信憑」は否定し難い。さらに、人は時に、感じたことを根拠に「いい学校だな」などと「確信・信憑」することがある、としている。

現象学ではその「確信・信憑」の成立条件と構造を解明することになる。それによれば、「確信・信憑」には意味を含まない「個別直感」、意味を表す「本質直感」があるという。さらに近年哲学者の竹田青嗣により「情動所与（欲望－関心）」が「発見」されたとしている。

本書では特にこの「欲望－関心」に注目し、「よい教育」についても誰もが普遍的に了解されるような「欲望－関心」を見いだし、それを十全に達成しうる社会や教育の根本条件を見いだせばよい、と主張する。著者はさらにヘーゲルの洞察をもとに人間的欲望の本質は「自由」で

あり、その十全な確保には「自由の相互承認」が必要であるのだから、当然に教育での「一般福祉」も目的としなくてはならないとする。本章の結論として、公教育の本質を「各人の〈自由〉および社会における〈自由の相互承認〉の〈教養＝力能〉を通じた実質化」(p.121)と定義している。

第3章「メタ理論Ⅱ 実証部門—教育学はいかに『科学』たりうるか」では、前章を受け、その科学性を検討している。科学的エビデンスがたえず検証や反証に晒されるべきものであるのと同様に、「欲望—関心相関的」な現象学的「体験」も常に反省されるべきものであるとする。これを拡張し、他者と共通理解を得られうる本質観取（現象学において意味や価値の本質を解明すること）を、それに至る諸条件を開示しながら構造化することが必要であるとする。また、その「科学的価値」はフッサールの言う「生活世界」での「よい教育」の実現に役に立つかどうかであるとしている。

第4章「メタ理論Ⅲ 実践部門—有効な実践理論・方法をいかに開発するか」では、諸実践理論・方法間の信念対立や相互嫌悪の状況を嘆いている。実践理論や方法を開発する方法論の乏しい中、わずかな例外として「デザイン研究」を挙げている。「デザイン研究」は実践的で複雑な現場での教育的課題に対して、先行研究の文献探索を通して、繰り返し解決方法の開発を行うことであるという。この「デザイン研究」が前章までに検討した内容を取り込むことができれば、実践部門のメタ理論となりうる旨を指摘している。さらに実践理論・実践方法の開発方法として「実証部門」の直接的応用、アナロジーに基づく一般化、アブダクション（仮説的推論）を挙げている。

第5章「教育学のメタ理論体系とその展開」では、いままでの主張を振り返ったうえで、〈教養＝力能〉の具体的内容について、「諸基礎知識」・「探究する力」・「相互承認の感度」を挙げている。そのために学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合が必要であるとしている。

本書に関してもっとも特筆すべき点は、多くのページを割き、フッサール・竹田現象学からの理論的支えを受けながら、教育学を丁寧に再構成したことである。特に、質的研究がポストモダン主義・相対主義から受けている各種批判にも応えつつ、自身の理論をそれらのメタ理論として矛盾なく包含しようとすることで、信念対立の壁を突き崩そうとしていることが出色である。

一方で、本書がいわゆる「本質主義」を助長しているというような初歩的誤認は避けなければならない。また、本書でもっとも重要な考察である「自由の相互承認」における導出過程のよりよい理解のためには、本書のみでは不十分で、竹田(2016)などの詳細な議論を確認する必要があるだろう。また、たとえ「自由の相互承認」が導出されるにしても、その中に持続可能性などの要素が含まれるかどうかの検討は必要であろう。人類は地球資源や地球環境を一方的に利用し続け、その結果人類そのものの持続可能性を危うくしていることは多くの人々に「確信・信憑」され得ると考えられる。その解決の方向性は竹田(2016: 258)が指摘する「資本主義における限界問題」とも類似する。したがって、「自由の相互承認」を次世代以降の人類にも拡張し通時的な概念とするか、あるいは持続可能性を「よい教育」の本質に加えるかいずれかの作業が必要であろう。

本書は著者自身が「あとがき」で言及しているように、「哲学部門」に偏重した構成になっているが、実際には著者は本書外でさまざまな教育実践にも取り組んでいる。例を挙げれば、いわゆる「義務教育学校」を含む軽井沢風越学園の共同発起人となり(堀水 2018)、他にも教員や生徒に対するワークショップを多数実施している(追手門学院 2018・茨城県教育研修セン

ター2020・自由学園 2020 ほか多数)。例えば茨城県教育研修センター(2020)「第12回『雑談しよう！未来の学校の本質は？』」では、「人を嫌いになってはいけません」とある教師にたしなめられた生徒が自分のところに来て「先生嫌いな人おらんか」と聞いたので、「おるよ」と答えた、という木村泰子(エピソード当時公立小学校校長)のエピソードが登場する。この発言を著者は「多様性がごちゃまぜのラーニングセンター」、「重層的な世界の中で子どもたちがいられることの安心感」といった表現で、「欲望—関心相関的」な共通理解の過程を積極的に受けとめている。

現象学の知見を応用した実践研究では看護学の例がよく知られている。例えば西村(2018)では医学的観察や測定をエポケーしたうえで、遷延性意識障害患者と看護師との「視線が絡む」、「自他未文化」といったコミュニケーションに関する考察を行っている。今後教育学でも計量的学力測定や合理的学習目標に依らない質的研究が蓄積されていくことが期待される。

本書は優れた考察で貫かれた稀有な良書である。さらに今後、著者には実践現場での実相報告を上梓することを期待したい。

茨城県教育研修センター. 2021. 「木村泰子先生と語る『きょういく』」

<https://www.center.ibk.ed.jp/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%95%99%E7%A7%91%E6%95%99%E8%82%B2/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%95%99%E7%A7%91%E6%95%99%E8%82%B2/Ed%E3%80%80Caf%C3%A9> (2022年8月17日閲覧)

追手門学院. 2018. 「教育哲学者 苦野一徳先生をお迎えしての研修を開催」

[https://www.otemon-jh.ed.jp/news/news\\_otemon/detail/172](https://www.otemon-jh.ed.jp/news/news_otemon/detail/172) (2022年8月17日閲覧)

自由学園. 2020. 「苦野一徳氏の自由学園生徒への特別授業が本になりました。『ルソー 社会契約論「よい社会」にたどり着くために』NHK 出版発行」

<https://www.jiyu.ac.jp/blog/info/74958> (2022年8月17日閲覧)

竹田青嗣. 2016. 『哲学は資本主義を変えられるか』東京: KADOKAWA.

西村ユミ. 2018. 「看護ケアと現象学的研究」『日本糖尿病教育・看護学会誌』22(1):57-60.

堀水潤一. 2018. 「そもそも教育とは何か、学校は何をすることか」『キャリアガイダンス』(リクルート進学総研) 422:8-11.

<https://souken.shingakunet.com/publication/careerguidance/vol42220185-995f.html> (2022年8月17日閲覧)